

新潟県下越海岸におけるミュビシギの羽装変化、特に初列風切の換羽状態
千葉 晃（新潟市）

【はじめに】ミュビシギは汎世界的な分布を示すシギ類の一種で、日本では長距離を渡る旅鳥として主に春と秋に全国各地沿岸に出現し、その一部は本州中部以南で越冬することが知られている。本種は干潟や砂質海岸を好み、関東・東海地方の海岸の他、石川県の海岸等にまとまった数で記録されている。世界的に見ると、日本を通過する個体は東アジア・オーストラリア渡り経路群に属し、ユーラシア大陸東部の高緯度地帯で繁殖し、東アジア温帯域から南半球オーストラリアに至る広い範囲で越冬しているものとみられる。本種の羽装や換羽は繁殖・越冬・渡り等と密接な関係があり、主に欧米や豪州で研究が進められてきた。日本ではこの点あまり研究されてこなかったようなので、今後に資するため新潟県の沿岸で検討してみた。

【調査地と方法】調査地は新発田市藤塚浜から新潟市越前浜に至る砂浜で、河口、港湾、漁港、埋立地等を含んでいる。自身の経験と関連文献から本種の生息地を探し、2017年8月～2018年8月まで不定期に海浜を調査した。本種を発見した場合は個体数を数え、羽装と換羽状態を400mm望遠レンズ付きカメラで記録した。初列風切は飛翔に不可欠な最重要部位であり、その換羽スコアは捕獲して精査するのが望ましい。しかし、換羽の時系列変化を知るためには一定期間にまとまった個体数を継続的に調べる必要があり、それを捕獲個体で行うにはかなりの困難が伴う。また、捕獲時に鳥体への負担が生じる可能性もある。そこで、今回は捕獲せずに多数の画像データから換羽スコアを求めることを試みた。

【結果】本種の出現時期は、初夏（5月中下旬）、秋（8月～10月）及び冬（11月～2月）に大別された。いずれの時期も小さいし中規模の群れ（数羽～最大約150羽）で観察され、初夏の群れは繁殖地に向かう北上群、秋のそれは越冬地に向かう南下群、そして冬の群れは新潟地方を含む国内に留まる越冬群に当たるものと判断された。初夏の北上群は夏羽（alternate plumage）または夏羽への換羽途中（すなわち pre-alternate molt）の成鳥からなり、秋の南下群は成鳥と幼鳥を含み、前者は体各部に摩耗が目立つ夏羽から冬羽への移行段階にあった。この時期の成鳥は全身が換羽中（pre-basic molt）で、画像から初列風切の換羽スコアを求めることができた。その値は8月下旬から11月初旬の間に21.9～49.9と明瞭な変化を辿り、最盛期は9月と判断された。一方、幼鳥は秋から初冬にかけて幼羽から第1回冬羽へ換羽するが、この換羽（pre-basic molt）は部分的で、主に頭、背、肩等の体羽でみられ、尾や翼では換羽の兆候が全く認められなかった。結局、新潟海岸で観察された本種成鳥の初列風切換羽はオーストラリアで越冬するものより2～3カ月先行することがわかった。本種は繁殖地や越冬地に応じて換羽時期を柔軟に変えている可能性がある。